

書の真髓をみよ――

孫曉雲【著】

書に法あり

百橋明穂【監訳】

B5判力バー装 本文二七二頁 挿図一六七点

本体価格三、八〇〇円＋税

ISBN 978-4-8055-0741-4 C1071

二〇一五年七月刊行

中央公論美術出版

現代中国書道界を代表する書家、孫曉雲氏。書家としての豊かな経験にもとづく書道の史的考察と実践を論じた原著は10万部を超えるベストセラーとなり、中国における書論関連書籍の最高記録を打ち立てた。その間、中国各地の美術館で『孫曉雲書法芸術展』、『書法有法（書に法あり）・孫曉雲書法作品展』が開催されるなど、中国本国で大きな関心呼んだ本格的「書道論」、待望の刊行である。

目次

著者略歴

自序

- 1.「中国」をCalligraphy(書法)と訳すほうがよい
- 2.戸惑いをもたらす三つのこと
- 3.「請ふ、其の本に徇わん」
- 4.「便捷」は何を指しているのか。
- 5.群盲象を撫ず
- 6.「永字八法」に疑念を抱く
- 7.執筆法を論ずる
- 8.「五指」か、それとも「五字」か
- 9.「撥鐙」はきわめて形象的である
- 10.「筆法」を用いて文字を書いてこそはじめて「書法」という
- 11.「人間は万物の尺度である」
- 12.筆法が出現した動機——その一 裏鋒と連続書写——
- 13.筆法が出現した動機——その二 懸腕法による書写——
- 14.大胆な推理
- 15.筆管の直径
- 16.筆頭の長短と硬軟
- 17.紙の起源と「動」、「拳」、「握」、「染」
- 18.「鋼美案」の啓発
- 19.筆法は書写時の姿勢により完成する
- 20.「古法」の最後の叫び
- 21.自覚のない喪失

- 22.机の功罪
- 23.「八分書」の解釈
- 24.「向背」より形勢出づ
- 25.巨大な象
- 26.「草草」は書法変遷の終着点である
- 27.「隸化」と「美化」の生理的な極限
- 28.三本の細い紐を縫って太い縄にする——「完法」
- 29.了るに掌を指すか如く、心に爛熟す——「尚法」
- 30.「結字は時に因りて相伝うるも、用筆は千古易らず」——「变法」
- 31.最も認めたくない現実——「無法」
- 32.書法は視覚芸術なのか
- 33.「屋漏痕」、「拆壁的路」、「折釵股」、「錐画沙」、「印印泥」の解説
- 34.「垂るるとして縮めざる無く、往くとして収めざる無し」に関する疑問について
- 35.「内擗」「外拓」についての語釈
- 36.最後に行書あり
- 37.「個性」はこのようにして形作られた
- 38.「意は筆前に在り」の言を正す
- 39.転筆は右から縦書きを決めた
- 40.「虚掌実指」の誤伝
- 41.「眇なる者は、目を識らず」
- 42.意識せずに「鹿を指して馬と為す」
- 43.「帖学」の崩壊
- 44.「碑学」の再認識
- 45.形を求めれば必ず「画字」に堕ちる
- 46.日本書道史略
- 47.書法とは何か、絵画とは何か
- 48.「書法の本質」とは——結論のない討議
- 49.書法の万能な鍵
- 50.パスでの悟り
- 51.中国絵画に対する戸惑い
- 52.「骨法」すなわち筆法
- 53.「書画」はここで「源を同じく」した
- 54.筆法なくして絵画は成らず
- 55.古来、華山へは一本の道
- 56.「文人画」は雲霧の中の遠山
- 57.「画を論ずるに形似を以てするは、見 兒童と隣す」
- 58.紙から紙へ抄す
- 59.真実とやむなく
- 60.箕子の物語

『書に法あり』改訂版あとがき
孫曉雲先生書道作品
訳校者あとがき



著者 孫曉雲 (そん・ぎょううん)

1955年、南京生まれ。

これまで中国書道界における「蘭亭獎・芸術獎」及び江蘇省第1回「紫金文化獎章」など、7回にわたって全国書法大賞を獲得した。現在、江蘇省美術館館長、中国国家画院書法篆刻院副院長、中国書法家協会理事、国家一级美術師などを務めている。また、全国書法展と「蘭亭獎」審議委員のほか、中国科学院、中国書法院、中国人民大学などで研究員、兼任教授を務めている。

監訳者 百橋 明穂 (どのはし・あきお)

1948年生れ。神戸大学名誉教授。著書に『東アジア美術交流史論』（中央公論美術出版、2012年）、『古代壁画の世界：高松塚・キトラ・法隆寺金堂』（吉川弘文館、2010年）など多数。

お取り扱い

中央公論美術出版

<http://www.chukobi.co.jp/>

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-10-1
IVYビル6F

TEL 03-5577-4797 FAX 03-5577-4798